

脊髄損傷のリハビリテーション up-to-date

Up-to-date issues of spinal cord injury rehabilitation

国や地域による差はあるものの、脊髄損傷、とくに頸髄損傷の発生数は高齢化に伴い増加傾向にあるということです。脊髄損傷といえば、以前は特定の労災病院やリハビリテーションセンターでのリハビリテーション治療が行われるのが中心でしたが、現在は回復期リハビリテーション病棟において治療されることも増えていると思います。しかし、脊髄損傷のリハビリテーション治療のスキルが不足している回復期の現場があることや、若年でスポーツ活動や職業面への対応の必要性があるのに自宅へ退院できればよしとされることなどの問題も生じています。一方、再生医療への期待が高まっており、リハビリテーション治療も大きな変化が求められてくるでしょう。本特集は、脊髄損傷のリハビリテーション治療と社会参加の現状と課題について、最新の知識をアップデートしていただくことを目的に、企画しました。

脊髄損傷—急性期治療と疫学 時岡孝光氏 415

軽微な外傷による骨傷が明らかでない高齢者の頸髄損傷が増加しており、Frankel CとDの軽症のものが多くなっている。脊椎の安定性を保つ必要がある症例では、低侵襲の手術を行うことによって急性期からのリハビリテーション治療を可能とする。排痰訓練、座位・立位訓練、歩行訓練などをできる限り早期から開始するとともに、適切な転院先を早急に調整するために、地域における病院間の連携を確立することも重要である。

骨髄間葉系幹細胞の静脈内投与による脊髄損傷治療 押切 勉氏ら 421

急性期の追加療法として用いられてきたプレドニゾロン大量投与療法は、有効性が限定的で副作用もあるため推奨されていない。著者らが研究・開発してきた骨髄間葉系幹細胞の静脈内投与は自己培養による幹細胞移植のために医学的・倫理的問題が小さく安全性が高い、患者負担が小さい、単回投与で効果が期待できる、リハビリテーション治療を阻害しないといった利点がある。再生医療等製品として期限付きの製造販売承認を昨年末に取得しており、今後を期待したい。

回復期のリハビリテーション処方 古澤一成氏ら 427

脊髄損傷のリハビリテーションにおいて回復期リハビリテーション病棟の果たす役割は重要である。機能的な回復を図ることはもちろんであるが、合併症の管理方法の確立とそれを自己管理できるようにすることが求められる。さらには、職業復帰や社会的自立などのゴール設定を行う知識と意識が必要である。今回は、とくに歩行支援ロボットの脊髄損傷者への利用についても触れていただいた。

スポーツ活動 緒方 徹氏 433

リハビリテーション治療にスポーツの要素を取り入れる目的は、運動による身体機能の向上だけでなく、スポーツの実践を通じた社会参加にある。慢性期の余暇活動・レジャーとしてのスポーツは重要であるが、脊椎損傷者の高齢化を見据えての健康維持・増進への取り組みも求められている。生活動作訓練のみでは運動耐性や有酸素運動能の向上を得ることは難しく、可能な形態でのスポーツ活動を導入していくことが重要である。

頸髄損傷者にとっての在宅就労—可能性と課題 小島正平氏 439

頸髄損傷者の多くは、就労の機会を得ないまま在宅生活を送っている。一方、彼らのインターネット利用率は一般の普及率と変わらないという。在宅勤務などの勤務形態を希望する頸髄損傷者は多いと思われるが、在宅で職業リハビリテーションを受けられる環境は不十分である。かがわ総合リハビリテーションセンターでの取り組みを紹介いただくとともに、重度身体障害者の就労に関する現状や今後の課題についても詳述いただいた。

書評	プロメテウス解剖学 コア アトラス 第3版 (評者：野田泰子) 438
	印象から始める歩行分析—エキスパートは何を考え、どこを見ているのか？ (評者：江原義弘) 482
お知らせ	第56回日本リハビリテーション医学会学術集会 425
	看護師・コメディカルのためのFIM講習会 495